

勤務医としての12年を振り返って

岡野 顕子[†] (京都市獣医師会・ダクタリ動物病院京都病院副院長)

私にとって犬は、特別な存在である。小さい頃から大きな犬が好きで、獣医師を志した理由も、大好きな犬を助けたいという思いからだ。学生時代に念願の大型犬ゴールデン・レトリバーと一緒に暮らすようになった。そこからは二人三脚、どこに行くにも彼の存在があった。学生時代は一緒に通学した。講義の間は研究室で、講義が終わるのを待っていてくれた。しつけなどは素人であったため、学生時代には行動学として、ともに生活するための社会性について学んだ。

動物病院に就職してからは、家で留守番させることが多くなった。仕事をしていても、早く家に帰りたいという思いが常にあった。自分が大切にしている子に自分の時間をさくことができず、我慢ばかりさせる毎日で、何のために仕事をしているのかと…しかし自分がその子を愛する気持ちがあることで、動物病院に来られる家族の気持ちも非常によく分かった。

そんな私が大学を卒業し、今の病院に勤務して早12年になろうとしている。新人の頃から変わらぬ“動物の命を助けたい”という思いを胸に今まで仕事をこなしてきた。

新人の頃は、早く一人前の獣医師になりたいと毎日がプレッシャーであったことを思い出す。大学では基礎系の研究室に所属していたため、臨床の知識は殆どといっていいほどなかった。大学でも、診察に必要な基礎知識は学習したが、臨床に必要な実技は実習で経験した程度である。大学時代には、卒業しても3カ月もすれば臨床系の出身者に追いつくといわれていたが、大嘘である。臨床系を目指すなら、やはり臨床系の研究室に進んでもっと勉強しておけばよかったと後悔している。それほど、研修期間の3年間はつらかった。

実際の臨床の現場にいと、この10年の獣医療の飛躍的な進歩を肌で感じる事が多い。私が獣医師になった10年前は、CTやMRIというものはなく、血液検査、超音波検査や単純X線が中心であった(現在でもそうであるが)。ところが数年の間に、画像診断の世界は広がり、超音波検査は、機器・獣医師の技術と共に飛躍的に進歩し、さらに現在は一般開業医においてもCTやMRI検査が当たり前の検査となっている。

同時に、動物は家族の一員という考え方が一般的となり、高度な獣医療を求められる反面、苦しめず終末

をそばで見送りたいという、家族の思いも強くなってきている。一般開業医として心がけていることは、家族が動物の死を受け入れられる環境を作ることである。どんなに高度な医療を提供したとしても、死を受け入れることができなければ良い獣医療を提供したといえないのではないだろうか。この家族の思いが獣医療をここまで進歩させたといっても過言ではないだろう。しかし、実際の動物病院の現場というのは、今も昔も教育という点に関しては変わっていない。

毎年、新人の獣医師が入社してくるが、できる技術、知識には当然ながら個人差がある。昔は、それを臨床の場でカバーすることができたが、今はどうだろう? 獣医療が進歩し、専門化も進む中、臨床の場だけで技術を習得するのは困難であり、また獣医学教育という面に関しても大きくは改善されていないと感じる。

獣医学教育の改善においては、全国の獣医学系大学に学生による参加型臨床実習の実施に向けた環境の整備が始められたところである。実際実習に来た学生たちは、初めて体験することが多く、また大学との実習の違いを述べている。大学病院での専門的な技術や機器は、多くの一般開業においては、コスト面や飼い主にかかる費用の負担などの問題により導入は困難である。しかし、医療に対する飼い主の期待は大きく、日々勉強、技術の習得に焦りを覚える日々である。

今後の獣医療の進歩・発展においては、獣医学教育の改革なくしてはありえないだろう。小動物臨床においてだけではなく、獣医公衆衛生学などの公共獣医事の点からも今後の獣医学教育の充実を期待する。

岡野 顕子

—略 歴—

- 2001年 日本大学農獣医学部獣医学科卒業
- 同 年 ダクタリ動物病院京都病院勤務
- 2007年 副院長に就任
現在に至る



[†] 連絡責任者：岡野顕子 (ダクタリ動物病院京都病院)